

生きて

JR徳山駅に近い周南市銀座の古書店「マツノ書店」を営む松村久さん(83)は、山口県内外の幕末・明治維新期の史料の復刻出版に40年取り組んできた。地方の小さな個人古書店でありながら、貴重な文献を200点以上復刻してきたことが評価され、2007年に菊池寛賞を受賞。本屋一筋を貫く。

幕末期の文献など270冊

子どものころから、父が開いた古本屋で店番や配達を手伝っていた。広島大在学中には資本ブームに目を付け、若い世代向けの資本屋「マツノ読書会」を始めました。1970年ごろは年間25万冊を貸し出す盛況で、全国から注目を集めた時期もありました。そのころに古本屋を再開。特色を持たせるため山口県の史料の収集を始めたが、目当ての本が見つからず帰ってしまうお客さんは少なくなかった。良い本を長く、多くの人に読んでもらうには自分で復刻するしかない。そんなサービス精神で始めたのが出版だった

復刻出版40年



「復刻出版は貴重な研究や文献を現代に位置付け、さらに数十年の命を与える仕事」

マツノ書店店主 松村久さん(1933年～) ①

苦勞して仕入れた一冊も、一人のお客さんには満足してもらえない。高価で研究者には手の出ないことも。復刻すれば同時に何十、何百の人に喜んでもらえると思っただけです。「毛利十一代史」(全10巻)「防長回天史」(全13巻)など県内史料を中心に出版し、この10年は対象を県外に広げた。手掛けた出版は、気付けば270冊になっちゃった。必要とされる本を必要だけ作る「本の産直」が信条だ。電話やダイレクトメールで注文を受ける直接販売にこだわっている。流通経費を抑えられるし、お客さんの顔が見える。優先して復刻する本はアンケートで決めている。長年育んできた信頼関係があるんです。今はインターネットで本を見られる時代。活字業界はどんどん小さくなってきている。うちも昔に比べ1点当たりの発行部数は減ったけれど、地方の小さな出版社がやってこられたのは、本の産直と自分の納得のいくものを以外扱ってこなかったからではないでしょう。貴重な本に再び、命を吹き込む仕事でもあるのです。(この連載は周南支局・高田果歩が担当します)

生きて

実家が呉服店を営んでいた父勇さん、母ヒデコさんの長男として1933年、山口県鹿野村(現在の周南市鹿野)に生まれた。3人の妹との4人きょうだいだ

旅券の間違いを屋号に

おやじは私が生まれて間もなく、本の行商を始めた。詳しい仕入れ先は分からんけど、卸屋から買ってたんじゃないかな。自転車で県境を越えて津和野(島根県津和野町)まで行き、田舎の小学校を回って先生相手に本を売っていたと聞いた。鹿野は人が少ないし、多く売るには遠くへ行くしかない。自転車にたくさん本を積んでいったらどうだろうか、大変な苦勞ではあるね。とにかくおやじは本が好きじゃった。

父の開業

3歳の時、家族で徳山駅の北西1キロ余りへ引っ越した。間もなくして勇さんは、自宅で古書店を開く。商売をするには人がたくさんいるところでないかと考えたのだから。「松野屋書店」という名前だね。名手が松村なのに、どうして屋号が松野なのか。父は若いころ、台湾で亡くなった義兄弟の遺骨を引き取るため、台湾へ行ったことがあった。そのとき作った旅券に、な



幼少期の松村久さん(左端)。右隣はヒデコさん

されていた。旅の最中は仕方なく「まつ」で通したが、こっちの方が気に入って松野屋にしたんでしよう。今もそのままマツノの屋号を使っています。

マツノ書店店主 松村久さん(1933年～) ②

39年、6歳で徳山尋常高等小(現徳山小)に入学。2年前に日中戦争が始まり、戦時色が深まってきた。目立たない子でね。勉強も飛び切りでやせんし、どうしようもないほどじゃない。中ぐらいよね。まあ本屋だから本は読むけど、人並み以上ではなかった。店と自宅が一緒だったから、友達を招くとみんな珍しがって本を手にとっていった。軍国教育も受けていたんだらうけども、特別覚えていない。当たり前と思っただけじゃろう。貧しい時代だった。同じクラスに、屋敷の弁当を持ってこれない子があつたのを覚えてる。周りの者がからかう。おやじの古本屋は日銭が入ってきたようだから、なんとか商売になつていたんだと思う。お金がなくて困るとか、そういうことはなかった。

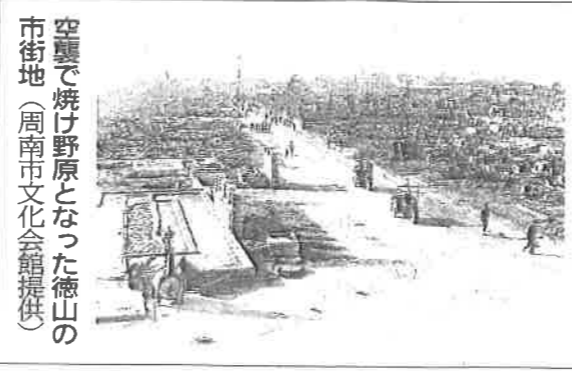
生きて

1945年春、徳山工業学校(現徳山商工高)へ入学した。戦況は悪化の一途。5月10日には米軍の爆撃機が徳山市(現周南市)の上空に飛来し、第三海軍燃料廠など沿岸部の軍事関連施設を爆撃した。おやじは5月ごろ、陸軍に召集されて宮崎県に配属された。42歳で兵隊としては高齢の部類じゃった。戦地へは行かんかったけども、それに合わせて古本屋は休業となり、母や妹は実家のある山口県鹿野村(現周南市鹿野)へ疎開した。

「ああ、これが戦争か」

徳山空襲

私は終戦まで約3カ月間、徳山市の職員だったおやじの知人に預けられた。そのお宅は今の周南市二番町にあり、そこから徳山工業学校へ通いよつたんです。7月26日深夜から27日未明にかけては、米爆撃機延べ100機余りによつて徳山市の市街地に焼夷弾や小型爆弾が落とされ、焼き尽くされた。7月26日の夜のことには忘れもしない。空襲が始まったのは二番町の家



空襲で焼け野原となった徳山の市街地(周南市文化会館提供)

にいたとき。とにかく街の中心から離れようと思つた。東の高台にある徳山工業学校の方へ、通学路がよく見知つた道を一人でどんどん逃げた。夜道を、火の海になつた市街地の明かりと空中で散らばる焼夷弾の光を頼りに。その道は今も自宅から店へ通うのに毎日車で通つちやる。だから思い出すんよね。学校の方まで逃げたら朝になつた。焼け野原になつた街を見下ろして、「ああ、これが戦争か」と実感した。街に戻つたら人がいっぱい死んでた。二番町の家と家族の無事を確認し、屋前に自転車で鹿野へ向かった。早く帰つて母と妹を安心させないといけないと思つて。おやじの古本屋は全部焼けてしまった。2度の徳山空襲による死者は約千人、家屋の全焼は4590戸とされている。当時、徳山中(現徳山高)の北側に小川が流れていた。徳山駅近くに住んでいた人の多くは、そつちへ逃げて亡くなつた。町は燃えて熱いから、水辺へ逃げるでしょう。それを米軍も知つちやるんよね。川べりにどんどん焼夷弾を落としていった。もし勉強が大好きで徳山中に入つていたら、そつちへ逃げていたかも知れない。

マツノ書店店主 松村久さん(1933年～) ③



復興の息吹感じ手伝い

終戦

徳山工業学校(現徳山商工高)1年の夏、終戦を迎えた。復員した父は、空襲の焼け跡のバラック小屋で新刊と古本を扱う本屋を始めた。戦争が終わると、おやじが官崎から帰ってきた。最初は私と2人で徳山(現周南市)へ戻ったんです。まず家と仕事場を作ることで大変だったからね。今の徳山動物園のすぐ南側に、ちょっと直したら住める家を見つけた。空襲の際の弾の跡とかは残っていたけど、住まうには不自由なかった。それで母と妹3人がこっちへ来て、家族6人の生活を始めたんです。

店舗は焼けてしまったので、徳山駅近くにバラック小屋を建てて、今度は新刊も扱い始めた。おやじはハイカラ好みでね、戦前の屋号をカタカナに変えて「マツノ書店」にした。私は学校から帰ると父の手伝いをしていた。店番だけでなく、雑誌の配達や、戸板と商品を持って商店街に出掛け、店の軒先を借りて街頭販売みたいなこともしました。



徳山高時代の松村さん(左から3人目)

戦後復興のために、みんな一生懸命働いた。空襲で焼けてしまった徳山に、どんどん道路や街ができていくのを見てうれしかった。1948年の学制改革に伴って、徳山高へ編入した。徳山工業学校3年のとき、おやじの店の手伝いを終え、家まで歩いて帰りよったときに友人に会って、徳山中が徳山高になるのに合わせて編入できるという話を聞いた。2、3日後にテストがあるという。家に帰って両親に言って、試しにやってみようということになった。徳山高は家からも近いしね。

マツノ書店店主 松村久さん(1933年～) ④

もともと物を作ったりするのは好きじゃない。科学とか物理とか興味はなかった。だから工業高校よりは普通科がいいと思って。徳山高はこころじゃトップランクの学校だけど、編入の試験は格別難しいってわけではなかった。戦後の混乱の時代だから、そんなことが運良くあったんだな。普通に入学試験を受けたら落ちるいね。高校時代は数学が得意で好きだった。将来は数学教師になるのもいいなと思ってた。本屋を継ぐことはあまり考えていなかった。編入後はそれなりに勉強したから、広島大へも受かった。それが貸本屋を始めるきっかけになった。



貸本屋相手 ブローカー

広島大入学

1951年、徳山高を卒業し、広島大政経学部に入學した。広島大進学は母の希望だった。ちょうどそのころ、徳山市(現周南市)の戦災復興の都市計画事業で徳山駅前の本屋は立ち退きを余儀なくされた。おやじがお人よしで換地をもらい損ねたこともあり、3年の間に5度ほど移転。どんどん経営が苦しくなってきた。

大学の周りには漫画を扱う子ども向けの貸本屋がたくさんあって、貸本屋用の市や卸屋が盛況だった。そこでうちでも卸をやってみようと思った。徳山の店の経営に一役買おうという思いもあってね。そこで大学3年の時、店に貸本部を設け、さらに希望者を募って徳山と周辺に約30件の貸本屋をつくった。「小資本で誰にでもできる貸本屋」との触れ込みのパンフレットを新聞の折り込み広告で入れたら呼び掛けた。周南地区で貸本業の下地ができたところで、広島で仕入れた本を学生定期を使って徳山に運び、毎週のように貸本用の本の市を開いた。

マツノ読書会の店舗前に並ぶ松村さん(左端)と父勇さん(左から3人目)



広島で安く仕入れた本を売りさばいた。いわゆるブローカーです。営業のアドバースなんかもしていた。大学4年のときに、ようやく店の場所が駅の北西へ落ち着いた。そこで今までにない若者向けの貸本屋を自分でやってみようと思いつき、「マツノ読書会」ができたんです。

マツノ書店店主 松村久さん(1933年～) ⑤

大学は1、2年生の時はずっと通っていたが、3年生になると店のほうが忙しくなるといって行かなくなった。大学へ行くのは学生定期を買うための証明書をもらうときくらい。広島で本を仕入れるにしても、学生定期を使うと格段に安くなるから商売上、具合が良かったんよ。大学は、2年留年した末に卒業した。大学3年からの専門課程に在籍できるのは4年間まで。つまり2留か限度で、それ以上は大学に残れない規則になった。母は店を継ぐより、いずれはどこかの企業へ勤めてほしかったようで、「せめて大学は卒業しなさい」ときた。だから6年目、もう後がなくなると必死にテストの勉強をした。授業へは交わらず出んかったけどもね。本当にしんどかったよ。卒業後も、試験で切羽詰まっていたころの夢を見てうなされるのがあった。



若者向け 年25万冊貸す

マツノ読書会

広島大在籍4年目に、父の書店の半分を使って開業した「マツノ読書会」。当時としては珍しい、若者に焦点を合わせた貸本屋だった。全国ではやっていたのは子ども向けの貸本屋で、店に並ぶのは漫画ばかり。うちは徳山駅のすぐ北に店を構えていたから、利用者の大部分は学生や会社員だった。じゃから漫画だけでなく、ベストセラーとか文学賞受賞作を置いた。井上靖や松本清張とかね。

大学卒業後、貸本屋の営業に本腰を入れた。顧客と交流も深めた。「朝刊の広告で見た本を夕方借りることのできる店」をモットーに、人気作家の新作は1点で20冊以上も仕入れていた。だいたいは定価の1割で貸していた。やがて漫画は一切置かなくなった。26歳の時、読書会を店の2階で始めた。そのころ愛読していた「徒然草」からとって「つれづれの会」と名前を付けた。皆で集まって同じ本を読んで感想を話し合う。自分もそういうのが好きだったしね。店の機関紙を1962年から10年間、月1、2回発行した。前月の貸し出しランキングや、お客さんから募集した詩、映画館の上映スケジュールなんかも載せて大変好評だった。68年に、今の店舗である周南市銀座に移った。貸本屋はそのころが最盛期で、夕方はお客さんが店内で擦れ違ふことができないほどのにぎわいだった。7割は女性客。1日に700冊、月で2万冊、年間では25万冊を貸し出した。人口が10万人規模の徳山でね。貸本業界や図書館の関係者なんかも視察に来て、全国から注目された。



貸本屋最盛期に店頭で接客する松村さん(右端)

マツノ書店店主 松村久さん(1933年～) ⑥

30歳で、常連客だった京子さんと結婚した。家内はうちをよく利用していた徳山高の生徒の一人で、本が好きな人だった。いい感じの子だなとは思っていたけれど、特に声を掛けることはなかった。彼女が高校を卒業後、市内で就職してから、たまたま近所の人から見合いの話があって紹介された。年は八つ下。結婚以来、今も毎日一緒に店で仕事する。1男2女の子宝にも恵まれた。彼女は字がすくすくきれいで、事務作業も得意でね。私の欠点を全て補ってくれている。ありがたいことです。



客と一緒にハイキング

山登り

貸本屋のマツノ読書会経営の傍ら、運動不足解消にと没頭したのが山登りだった。

昔から山登りは好きだった。徳山動物園の北側にある標高約2500mの岐山を、毎日一人で登りよった。朝夕は店が忙しいから、昼に店をパトさんに任せて出掛けた。日頃、店に閉じこもっているから山に行くとな開放される。仕事は好きだからストレスは全然たまらなかつたんだけど、体を動かすと気分が良い。毎日宿題みたいに登った。

登り切ったうれしさは格別で、山口県内のいろいろな山に登るようになった。周南市の助ヶ岳や、広島、島根県境にそびえる岩国市の寂地山、山口市の東鳳山など30以上の山に何度も登りにいった。店の経営にも余裕ができた30〜40代が一番登っていたであろう。60歳ぐらいまで定期的に登った。登山道が整備されている所は少なかったから、5万分の1縮尺の地図を見て、麓の集落とか近くの山を目印にして歩いた。店の機関紙「ランベル」に、登っ



店の客と山登りを楽しむ松村さん(左)

マツノ書店店主 松村久さん(1933年〜) ⑦

た山の地図や特徴、登ったルートなどの情報を掲載した。

当時はまだ、県内の山を紹介するようなガイドブックがなかった。せっかくなので山に行っているんだから、店の営業に生かそうと思って。お薦めの山ランキングなんかも掲載して人気だった。

ハイキングのガイドブックを出版しようと本気で思ったこともあったけれど、やめた。山道は変化するものだし、自分の本を見て登った人が遭難でもしたら大変だからね。

顧客に呼び掛けて一緒にハイキングすることもあった。

山好きのお客さんたち5人くらいで行くこともあれば、30〜40人参加者を募って貸し切りバスで行くハイキングツアーもやっていた。徳山を朝出発して夕方に帰る。ツアーは平日に行くことが多かったと思う。

少し前にはやった「川は流れる」とか「山のロザリア」なんかを休憩時間にみんなで歌って、頂上で弁当を食べた。一人で登るのも好きだったけど、みんなでわいわいしながらのハイキングも楽しかったね。山登りは間違いなく、今の健康につながっています。



県内の良書 多くの人に

復刻出版

貸本屋のマツノ読書会は1968年、周南市銀座の駅前商店街にある今の店舗へ移った。

14年間腰を据えた徳山駅北の店舗の賃料が上がったのを機に、現店舗へ引っ越すことにした。もともと支店として営業していて、ちょうど物件を建て替えるというんで思い切った移ったんです。同時に古本屋の営業も「マツノ書店」の名称で始めた。特色を持たせるため、山口県の史料をそろえた。

移転当時は貸本業の最盛期で1階を貸本屋、2階を古本屋にしていた。でも次第に貸本屋の客が減ってきた。繁華街の中じゃから通勤通学で店の前を通る人は減ったし、客層も若者ばかりではなくなりました。店を入れ替えて1階に古本屋を置いたところ、お客さんがどんどん増えた。

移転から6年後、41歳のときに復刻出版に乗り出した。

店番でお客様をよく見ると、目当ての本を探しに来て、見つからずにごっかりした表情で帰る人の多いことに気付いた。しかもなかなか



初の復刻出版「大内氏実録」を手にする松村さん

マツノ書店店主 松村久さん(1933年〜) ⑧

の希少本をね。苦労して仕入れたとしても、一人のお客さんにしか満足してもらえない。自分がその本を復刻すれば、同時に多くのお客さんに喜んでもらえると思っただけです。

一つの本を多くの人に読んでほしいというのは、長年貸本屋をやってきて身に付いた気質かもしれない。出版も県内の史料に特化した。最初に復刻したのは「大内氏実録」。守護大名大内氏の研究書で、歴史好きや研究者の間で良書として知られ、特に求める人が多かった。

良い古書を集めるために車が必要になり、免許を取った。最初の愛車オレンジ色のフォルクスワーゲン・ビートル。こんな派手な車に乗っている人はあまりいなかったから人目を引いて、店の宣伝にもなった。

出版を始めて間もなく、20年間続けたマツノ読書会に幕を下ろした。

復刻出版に時間を割くようになり、貸本に古本と、とても手が回らない。それで下火になりつつあった貸本屋をやめたんです。以来42年出版業を続け、270点を刊行した。店を移っていなかったら出版業をしていなかったかもしれない。そう考えると移転は英断だったわけですね。

特集

「良い本だけ」教え守る

宮本常一との出会い

山口県周防大島町出身の民俗学者宮本常一との出会いは1975年。19点目の出版となった「明治大正長州北浦風俗絵巻」の監修を依頼したことがきっかけだった。

小西常七さんという山口県豊北町(現下関市)の漁師が描いた明治、大正時代の漁業や生活の様子を絵をまとめて出版しようと考えた。宮本先生とは全く面識がなかったんじやけども、監修をお願いしてみようと絵の写真を送ってみた。「ぜひ引き受けて」と返事をいただき、一緒に1泊2日で小西さんを訪ねた。

先生は300枚近い絵の一枚一枚について聞き取りをされ、その姿を隣ですと見ていた。柔らかい物腰と的を射た質問に、古きは次々と昔の記憶をよみがえらせた。宿で夜遅くまで絵の分類をし、翌朝も聞き取りをされた後、九州の離島に向かわれた。数週間後、200枚以上分の解説原稿が届き、先生の旅と仕事ぶりに圧倒されました。

宮本は良き相談相手となり、出版物の解説や推薦文を引き受けた。交流は宮本が他界する直前まで続いた。



松村さんの愛車ビートルと宮本常一

マツノ書店店主 松村久さん(1933年〜) ⑨

するのが好きだった。翌朝、愛車のビートルで目的地まで送り届けるのが私の役目。慎重な運転を気に入っていたそうです。

車中では、訪れた土地土地のことを聞かせてくれた。政治の話も多かった。今思えば、ためになることばかりで録音しておけばよかった。夢みたいな話ですよ。

宮本の追悼文集「宮本常一 同時代の証言」を2004年に復刻した。亡くなった81年にお弟子さんが出版し、私も寄稿させてもらった。さまざまな方面の方が先生との思い出をつづいた良書で、よく売れて品薄になった。それで23年後の命日に合わせて復刻したんです。同時に雑誌の追悼特集や新聞記事などを収めた続編も作りました。

先生は、会うと口癖のように「決して急がず、良い本だけを出すように」「良くない原稿を断るときは、いつでも私が悪者になってあげます」とおっしゃられた。今までもっとその教えを守り、自分の納得したものだけを出版しています。

◇ 次回は31日に掲載します。



書店に卸さず直接販売

本の産直



復刻出版した本の数々

必要とされる本を必要だけ作り、必要とする人に直接販売する「本の産直」を貫く

出版を始めた時、①刷部数は千部まで②定価は3千円以上③完全原稿であること④決して急ぐな⑤年間6点以内⑥という出版5原則を作った。内容は山口県の歴史と民俗に限ってね。時代の流れで刷部数や定価なんかの数字は変わったけれども、ずっと貫いています。10年目くらいに、12000円の本を5千部も刷ったことがあった。あまり売れず赤字になってね。やはり5原則を守った方が黒字になる。同じ傾向の本を続けると飽きられ、売り上げが落ちる失敗はよくあるけれどもね。

ダイレクトメールによる直販に徹し、書店への卸しはしない。約1500人のお得意さんへ2、3年に1度アンケートをして、優先的に復刻する本を決めている。どれくらい売れるのか把握できるから、極端な売れ残りの防止につながる。何よりお客さんの顔が見えるからね。注文を受けたら即日発送。長年かけて築いてきた信頼関係があるんです。

毎朝6時には店に出て、得意先に送るパンフレット作りや、買い集めた古本から復刻するべき本の発掘に取り組み。県外の得意先の声に応え、明治維新全般に守備範囲を広げた

出版が決まったらパンフレットを作る。釣りという餌みたいな物で、最も重要な仕事。研究者たちに依頼して書いてもらった推薦文や目次、本の一部の写しを配置する。

何点かは再版もした。1991年に一大決心の末、復刻した維新全史「防長回天史」(全13巻)はその一つ。古本屋は復刻に値する本を見抜く目がある程度持っている。「量より質」で、出したい本を着実に作っていくのが古本屋の出版なのだ。

86年、「反面教師だった」という父勇さんが82歳で亡くなった。あれやこれやと手を出す人でね。古本屋に新刊を置いてみたり、ミニコミ誌を作ってみたり。店内でいるこ屋も始め、お客さんの要望でしまいにほとんど売れなくなった。健全経営には程遠く、借金もあって苦労した。2代目の私が店を上げず欲張らず、貸本、古本、出版と続けられたのは、おやじの後ろ姿から学ぶことが多かったからかもしれんね。



マツノ書店店主 松村久さん(1933年～) ⑩



「地方」に光 大きな反響

菊池寛賞



菊池寛賞の授賞式会場で記念撮影に収まる松村さん(右端)

明治維新史料など貴重な文献を200点以上刊行してきたことが評価され、マツノ書店に2007年、菊池寛賞が贈られた。74歳だった

受賞の報告を受けたのは10月、徳山高時代の同級生と高知県を旅行していた時だった。皆で酒を飲んでいたら息子から携帯電話に連絡があった。「菊池寛賞を受けてくれないかと、東京から電話がきた」とね。間違いだと思っただけに確認してもらった。それでも間違いじゃない、よく調べた上だと言われた。次の日じやったかな、夕刊にマツノ書店が受賞と載つちよった。「本当じゃ」とたまげてね。寝耳に水な話でした。

年末に東京のホテルで授賞式があった

同じ年に受賞したのは作家の阿川弘之さん、歌舞伎俳優の市川團十郎さん、落語家の桂三枝(現桂文枝)さんたち大物ぞうい。家に1着だけあった背広に袖を通して出席した。普段着ないものだから窮屈だったね。

授賞式後のパーティで、選考顧問を務められた解剖学者の養老孟司先生がスピーチで「松村さんはお年の割に元気で若い。いずれ私のところに献体して、解剖の対象になつてほしい」と冗談をおっしゃられたものだから会場は大笑いじゃった。うれしかったね。一緒に連れて行った孫が会場をバタバタと走り回って、それを止めるのに苦労したよ。

受賞は、うちの本を買っていただいていのお得意さんのおかげ。地方の小さな古本屋兼出版社に光を当てていただいた反響も大きく、本当に幸せだった。あらためて大切なお客さんのためにも長生きして、より良い本を出していこうと思いました。

受賞決定の4カ月前、全国の明治維新に関する記録をまとめた「復古記」(全15巻)を復刻出版した

復刻が待たれてきた本だが、大作すぎてこもやっこなかつた。そこで版權を持つ東京大学出版会に私が働き掛けた。最終的に学術出版最大手である東大出版会が復刻し、うちが全て買い取って販売するというとんでもない条件で許可が出た。定価の3割引きの11万円で販売して250セットを完売した。売れなければ店がひっくり返る大仕事じゃった。自分ではこの復刻が受賞のきっかけなんじゃないかと思ってるよ。

マツノ書店店主 松村久さん(1933年～) ⑪



デジタル時代 紙に価値

本屋の明日



店内で本屋一筋の人生を振り返る松村さん

貸本屋のマツノ読書会時代の営業日記などが本にまとめられ、8月に金沢市の出版社から刊行される

古本屋兼ミニ出版社となって1974年に貸本屋をやめるとき、東京・高円寺でうちと同じように大人向けの貸本屋をやっていた親交のあった大竹正春さんが、私の付けていた貸出冊数の記録や売り上げ帳、営業日記なんかを欲しいと言ってくれた。捨てるくらいならと思って皆差し上げた。

その後、大竹さんから図書館関係の本を専門に出版している金沢文庫閣に渡り、このたび「貸本関係資料集成」戦後大衆の読書装置」の補遺編(全8巻)の1、3巻に載ることになった。もう貸本屋はほとんどなくなってしまったから、貴重な資料になったんだろう。ありがたいことです。本になれば、ずっと残るわけだからね。

「活字が空を飛んでくる時代になった」という。デジタル時代の本の価値とは

活字業界全体がデジタル化で厳しくなっている。パソコンやスマートフォンで、本がただ同然で読めるからね。うちも復刻出版を始めた当初は1点当たり平均500部は刷っていたけど、いつしか300部に減り、今や200部になっている。

ちょっと捨読みするのにはデジタルは便利かもしれない。じゃけれども本は読むだけでなく使うもの。きちんととじられている方がすぐに必要なページを開ける。読み比べたり、印を付けたりするのには具合がいい。

紙は何百年と保存できるが、デジタルはハードが変われば使えなくなる。デジタル化が進めば進むほど本の価値は上がっていく。その辺に本屋のこれからの保証があると思えます。

もともと文学青年ではないし、歴史が好きなのでもなかったんよ。だからこそ趣味にのめり込むことなく、常識にとらわれることなく「型破りの本屋」を続けてこれたんじゃないろう。これからお客さんと価値ある本のために、復刻出版を続けていきます。

おわり

この連載は周南支局・高田果歩が担当しました

◇ 次回の「生きて」は6月に掲載の予定です。

マツノ書店店主 松村久さん(1933年～) ⑫